
開会挨拶

【司会】 これより中山大学日本研究センター、文学院と東京大学グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」の共催によるシンポジウム「東アジアの死生学へ」を始めます。

まず本学院の名誉教授、林慶勳先生からご挨拶をいただきます。

【林慶勳（台湾国立中山大学中文系名誉教授） 会場のみなさま、おはようございます。ここでは本来、文学院の李美文院長からご挨拶を申し上げる予定でしたが、体調不良ということで、李先生がすでに書かれました原稿を代読したいと思います。

本日は本学の日本研究センターと東京大学グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」の共催によるシンポジウムに参加し、多くのみなさんと一堂に会して意見を交換できることをたいへん光栄に感じてお

ります。

死生学とは、社会学・文学・医学・法学等多くの学問と深く関係し、理論の面からだけでなく実践の面からも、生あるいは死に関するさまざまなことを考えていこうとしている学問です。この死生学という学問が提供する見解は、社会的な文化背景が形成した知識体系と密接な関係にあります。死生学の視点から考えますと、人類の知識体系はおおまかに、宗教・哲学そして科学の三つに分けることができます。宗教は、人の生まれる前とその死後を主な研究対象とします。科学は、人が生まれてから死に至るまでを研究します。そして哲学は、思想面のすべての時空を貫徹していると言えらると思います。これらの学問分野のあいだ、それらの関係こそがまさに、死生学がカバールしようとしている部分でしょう。

近年は台湾でも、人々の間で死生学に対する興味が高まるのと呼応するように、死はタブーではなくなり、公の場で議論されるようになってきました。死に対する関心はまた、現代人がいかに生のクオリティを追求しているかを反映しているものでもあります。孔子はかつて「いまだ生を知らず、いづくんぞ死を知らんや」と言いましたが、死の衝撃によって、生にも波が起ります。「死に接してはじめて生きることができるといふ言葉がありますが、死に接することでその生命観が変化したという人は数多くいます。死の足音が近づいてくると、人は生命の意義を、生と死を、正面から見据えなくてはならなくなります。ダライ・ラマはかつてこのように言いました。「もし安らかに死にたいのであれば、よく生きるということを必ず学ばなくてはならない。そして、心の平安と生の平和というものを培わなくてはいけない」と。

今日この「東アジアの死生学へ」というシンポジウムを通して、我々がよりポジティブに死生の問題を見つめなおし、我々の人生観についてより深い認識を持つことができればと思っております。会議の成功をお祈りしております。ありがとうございました。(拍手)

【司会】 続きまして東京大学の池澤先生、ご挨拶をお願いいたします。

【池澤優（東京大学教授）】 ご紹介にあずかりました池澤でございます。

まずは、この「東アジアの死生学へ」と題しますこのシンポジウムにあたって、このようなすばらしい機会と場所を用意していただきました中山大学日本研究センターならびに文学院の関係者のみなさんに心から感謝の意を申しあげたいと思います。

私ども東京大学人文社会系研究科・文学部の死生学プロジェクトは、今から十年前、二〇〇二年に始まりました。最初は二十一世紀COEプログラム、二〇〇七年からはグローバルCOEプログラムとして進めてきたプロジェクトですが、二〇一二年三月にCOEプログラムとしては終了することになっています。

私どもの死生学プログラムは、主に欧米で進められている死学・タナトロジー (Thanatology) と共通する問題関心を持ちつつも、我々の文化的伝統・歴史・哲学・思想にもとづいた、独自の生と死に対する考え方に依拠して、新たな学問を構築することを志向しております。このような問題意識から、特に二〇〇七年からのグローバルCOEプログラムでは、東アジアという文化的土壌の中で生と死というものがいかに捉えられているか、どのような死生観をこれから構築していくべきかという課題を研究の一つの軸として継続的に考えてきました。

この「東アジアの死生学へ」というシンポジウムも、最初二〇〇八年に北京で開催し、それから台北、ソウルと続き、今回の高雄で四回目になります。その中で、東アジアにおける文化の多様性と共通性を知ることができたのは大きな収穫でありました。特に台北でのシンポジウムについて申しますと、台湾で傳偉勳先生の影響で死生学（生死学）が発展し、かつそこでは独特の考え方が構築されていることを知ることができました。

傳偉勳先生の業績を見てみますと、むろん内容は違うものがあるにせよ、我々の死生学が向かっている方向とかなり共通する部分があるのではないかと思っております。傳偉勳先生は、アメリカのテンプル大学でいわゆるデス・エデュケーション（Death Education）——これはアメリカで生まれた学問ですが、これを担当しつつも、アメリカの死にたいする考え方というものには満足できず、特に仏教や道家思想にもとづく死生観を構築しようとしたと私は理解をしております。

我々のこの死生学のプログラムが目指しているところも、欧米における死学の伝統をふまえつつ、自分たちの持っている文化的伝統にのっとって別の方向をさぐるということです。本日このシンポジウムでは、台湾と日本の文化的伝統にもとづいた生と死の考え方を互いに報告し、理解することができましたら幸いです。

以上、簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。（拍手）

【司会】 池澤先生ありがとうございます。続きまして、鄭力軒・日本研究センター執行長の方からご挨拶申しあげたいと思います。

【鄭力軒（台湾国立中山大学日本研究センター執行長）】 はじめに、本学社会科学学院院长である林文程先生に代わりまして、日本ならびに台湾各地からはるばるやって来てくださいましたみなさま方に歓迎の意を表したいと思えます。林先生は本日所用のため出席ができませんでしたこと、お詫び申しあげます。

本学日本研究センター、文学院と東京大学COEプログラムによる今回のシンポジウム開催のために多くのご協力をいただいたみなさまに感謝を申しあげます。特に日本研究センターの研究員である廖欽彬先生は、この会議のためにさまざまご尽力くださいました。

二〇一一年三月十一日に発生した地震・津波は、世界規模で見ても、近年では最も大きい自然災害のひとつでした。また、それに続いて起こった原子力発電所の事故も、いまだかつて無かったほどの規模の犠牲を出しています。この場を借りて、犠牲者の方々に対して哀悼の意を、そして被災者の方々がこの過程のなかで見せてくれた忍耐強さに対して尊敬の意を表したいと思います。また被災地域のすみやかな復興をお祈り申し上げます。

自然災害の衝撃は非常に大きく、人命および日常生活上の多大な損失をもたらしました。しかし同時に、今回のことによって、我々は人類のすべての文明や価値というものをあらためて考える機会も与えられました。災害は我々に、日頃慣れ親しんださまざまな世俗的な価値や執着というものを離れて、生の根本的な意義や価値を見つめなおすことを迫っています。今回の会議の目的は、このような災難の傷を克服してさらに上へと昇っていくために、思想面・文明面における再出発への契機を案出すること、そしてさらに、文明と社会が前進していくための道をあらたに築きなおすことです。

中山大学日本研究センターは、台湾南部の日本研究の窓口であります。今回このような会議を催すことができ、とても光栄に思っております。本会議の参加者の方々が、会議後も我々をご指導くださり、そしてとくに台湾における日本研究をレベルアップさせてくださればとも思っております。

ありがとうございました。(拍手)